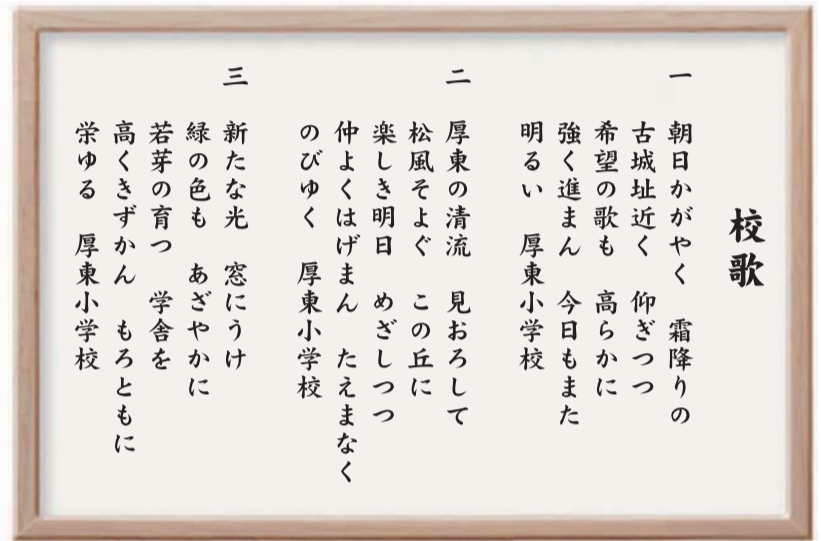




<厚東③ 小学校歌>

厚東小（西嶋智校長、69人）の前身は1875（明治8）年に開校した棚井、吉見、広瀬の3小学校。85年に棚井小が同校の引地分校と広瀬小を統合し、厚東小に改称した。89年に吉見村、棚井村、末信村、広瀬村が合併して厚東村が誕生。厚東郡は江戸時代に厚狭郡の一部となっており、200年以上の時を経て「厚東」の地名が戻ることになった。その後、吉見小は99年に廃校となった。

卒業生が作詞、古里の描写に苦心



「豊かな自然と歴史を感じる」



厚東氏の城があったとされる霜降山

校歌は開校85周年記念事業の一環で、1959年に制定された。作詞は卒業生の岡部翠さん、作曲は山口大教育学部で教壇に立っていた鶴岡義郎

さん。「厚東小学校九十年史」によると、岡部さんの追憶記には「子どもたちの頭に迫る霜降山、清々とたゆまず流れる厚東川、窓辺に希望の光を投げる松の緑、それらが子どもたちに強く呼び掛ける言葉を苦心したが、とうとう私にはそれができず『古城址（し）近く仰ぎつつ』といったような魅力と迫力に乏しいものになったことが不満でならなかった」とある。一方、同校の卒業生で教員となった林正三さんは、2006年に厚東郷土史研究会が発行した「厚東」に、「こんなエピソードを寄せた。林さんが大学在学中に鶴岡さんの講義を受けた際、鶴岡さんが「校歌の歌詞を一度だけ読み味わい、作者と話をしただけで最後のフレーズのメロディーが頭に浮かんできた」と話したというのだ。また前奏のメロディーも、自然に恵まれた厚東地区を歩く中で、自然と浮かんできたという。4月に就任したばかりの西嶋校長は「『厚東の清流』や『緑の色も』など、豊かな自然に関するフレーズがふんだんに盛り込まれている。長い歴史を感じさせる歌詞もすてきだと思っ」と魅力を語った。